



(略称：ハウズ) 2024年度後期 変革のための共学の広場

本郷文化フォーラム ワークススクール

- 2024年度後期 (11月～3月・7シリーズ22講座)
- ◆改憲情勢と日本社会のイデオロギー状況を振り返る
- ◆職場と労働を映画から考える
——自分が労働者であることを見つめ直すために
- ◆パレスチナにおける絶滅戦争
——その経済的背景とイデオロギーを問う
- ◆朝鮮は孤立していない!
- ◆世界の短編小説を読む
- ◆芸術運動のアクチュアリティ
- ◆この人にきく



重要なお知らせ

定員30名の事前予約制です。また急きょ中止・延期する場合もあり得ますので、参加希望の方は必ず電話番号をお教えください。普通より熱が高いなど体調に変化がある方は参加を遠慮してください。

HOWSの電話番号が変わります

080-9816-3450

※旧電話番号およびFAXは、2022年11月以降は使えません

HOWS 講師一覧	
青木 秀樹	弁護士
秋葉 裕一	早稲田大学名誉教授・レヒト研究者
明 真南斗	『琉球新報』記者
浅井 春夫	立教大学名誉教授
浅井 基文	国際問題研究者
安里 ミゲル	プロレタリア詩人
浅野 健一	ジャーナリスト・元同志社大学教授
朝生 進	全農林労働組合分會役員
瀧美 博	編集者
天羽 憲治	日本音楽協議会元事務局局長 全通全国音楽協議会元事務局局長
雨宮 処凛	作家
荒井 晴彦	脚本家・映画監督
新垣 毅	『琉球新報』記者
荒川 源吾	歌人、元古河電産労組文芸サークル
新崎 盛吾	元新聞労連委員長
栗津 ケン	デザイナー
飯塚 勇	全厚生労働組合元執行委員長 名古屋学院大学教授・戦争をさせない1000人委員会事務局次長
飯島 滋明	慶應義塾大学非常勤講師
五十嵐 彰	愛媛大学教授
井口 秀作	福島原発元作業員
池田 実	弁護士
池宮城紀夫	詩人
石川 逸子	詩人
石橋 正孝	文芸評論家
石橋 学	『神奈川新聞』記者
板垣 雄三	東京大学名誉教授
井上 紀州	脚本家・映画監督
伊藤 彰信	元全港湾委員長
伊藤 拓也	学校事務職員労働組合神奈川
イナノ・オネル	翻訳家・映像家
井野 博満	金庫科学・原子力問題・環境問題
井野 茂雄	文化活動家
今中 哲二	京都大学複合原子力科学研究所研究員
伊波 洋一	参議院議員、会派 沖縄の風
李 泳 采	恵泉女学園大学教授
岩田 昌征	千葉大学名誉教授
上杉 聡	日本の戦後責任資料センター事務局長
上杉 忍	横浜国立大学名誉教授
植村 隆	韓国がソウルの客員教授(元『朝日新聞』記者)
内田 聖子	NPO法人アジア太平洋資料センター<PARC>共同代表
内田 妙子	元JAL不当解雇撤回裁判原告団長
内田 浩	元出版労連書記次長
内田 雅敏	弁護士 / 戦争をさせない1000人委員会事務局次長
梅田 正巳	高文研 前代表、書籍編集者、歴史研究者
江刺 昭子	ノンフィクションライター・女性史研究者
大西 赤人	作家
大畑 龍次	朝鮮・中国研究者
岡本 有佳	編集者
尾澤 孝司	韓国カンファレンスを支援する会事務局次長
小谷野 毅	全日本建設労働連帯労組書記長
及部 克人	武蔵野美大名誉教授・デザイン
海渡 雄一	弁護士
柿山 朗	元海員組合全国委員 / 元外航船長
笠原 十九郎	都留文科大学名誉教授
片山 夏子	『東京新聞』記者
加藤 晋介	弁護士
金山 壽	前全国労働組合連絡協議会議長
金澤 明子	画家
加部 洋祐	歌手
鎌倉 孝夫	埼玉大学名誉教授・経済
鎌田 哲哉	『重力』編集会議
鴨 桃代	全国ユニオン連合会・元会長
唐沢 武臣	元労本部長

河添 誠	元首都圏青年ユニオン
康 宗 憲	韓国問題研究所代表
康 成 銀	朝鮮大学校朝鮮問題研究センター研究顧問
北 健一	ジャーナリスト
木田 節子	東日本大震災被災者・福島からの原発避難者
北川 広和	『日韓分析』編集者
金 志 永	『朝鮮新報』編集局長
金 静 実	在日本朝鮮人権協会
金 淑 美	『朝鮮新報』記者
金 才 順	在日本朝鮮民主女性同盟中央本部国際部
金 治 明	沖縄戦と朝鮮人強制連行を記録する会
金 哲 央	国際高麗学会理事、哲学博士
金 東 鶴	在日本朝鮮人権協会
金 有 秀	朝鮮大学校朝鮮問題研究センター・在日朝鮮人関係資料室室長
金 有 彦	千葉朝鮮初級学校元校長
木村 辰彦	沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック
木村 文洋	映画監督
金野 正晴	自営業
國枝 幸幸	全厚生労働組合事務局次長
國分 富夫	『福島原発被害者相双の会』会長 神奈川県日中友好協会名誉顧問 アジアサイエンスパーク協会名誉会長
久保 孝雄	一規
熊本 一規	明治学院大学教授
琴 基 徹	月刊『イオ』元編集長
倉沢 愛子	慶應義塾大学名誉教授
倉林 誠	国労高崎地本委員長
栗原 君子	元参議院議員
柳沢 健	文芸評論家
黒田 節子	原発いらない福島の人たち
藤 厚夫	明治大学特任教授
粉川 哲夫	メディア論
古志 峻	朝鮮問題研究
越川 芳明	明治大学名誉教授、アメリカ文学者
古関 彰一	獨協大学名誉教授
高 賛 侑	映画監督
兒玉 聖史	自治労中央本部元青年部長
五島真理	医療カウンセラー
小林 春彦	元国労千葉地本委員長
近藤 和樹	日本社会主義青年同盟中央本部前委員長
斎藤 貴男	評論家・ルポライター
在間 秀和	弁護士
佐久間 誠	元鉄道公社原田原田中央協議会事務局次長
笹木 繁	美術ドキュメンタリスト
佐々木史朗	全統一労働組合書記長
笹山 久三	作家・元郵政労働者
佐藤 勇輝	20世紀フランス文学・思想研究
佐野 通夫	東京純心大学客員教授
清水 早子	宮古島ピースアクション実行委員会 ミサル基地いらない宮古島住民連絡会
清水 雅彦	日本体育大学教授・憲法学
下見 徳章	『伝送便』編集委員
富満谷真一	全日本水道労働組合前書記次長
朱 建 榮	東洋学園大学客員教授
庄子 正紀	全国一般・全労働者組合書記次長
慎 蒼 宇	法政大学教員
結 秀実	文芸評論家
菅井 益郎	国学院大学名誉教授・市民エネルギー研究所
杉原 泰雄	一橋大学名誉教授・憲法
杉村 和美	出版ネット執行委員・編集者
杉山 雄大	二松学舎大学非常勤講師
鈴木 圭子	JAL被解雇者労働組合副委員長
鈴木 友陽	全農林労働組合分會執行委員
須田 光照	全国一般全国協議会東京東部労組書記長
関谷 興仁	陶板作家、(益子)朝霧館館長
瀬戸 宏	大阪摂南大学名誉教授
ダイロン・オハダ	駐日キューバ共和国大使館一等書記官
高井 一穂	自治体労働組合活動家・コースワーカー

高井 潔司	元桜美林大学教授
高里 鈴代	基地・軍隊を許さない行動する女たちの会
高嶋 伸欣	琉球大学名誉教授・社会科教育
高野 飛鳥	中部全労協事務局長
高橋 哲哉	東京大学名誉教授
高橋 俊次	『日韓分析』編集者
高橋 美香	『朝鮮新報』編集局長
高橋 美香	フォトジャーナリスト
高良 鉄美	参議院議員、会派 沖縄の風
滝野 忠	琉球大学法科大学院名誉教授
滝本 匠	『社会通信』発行人
滝本 匠	『琉球新報』記者
竹見智恵子	ジャーナリスト
田代 ゆき	組版労働者
立野 正裕	元明治大学教員・英文学
田中 宏	一橋大学名誉教授
田端 博邦	元東京大学社会科学研究所教授
崔 権 一	在日本朝鮮人総聯合会大阪府本部副委員長
蔡 萬 洙	韓国・労働社会科学研究所所長
鄭 榮 桓	明治学院大学教員
津田 憲一	元神奈川県中学校教員
植田 敦	物理学者、核開発に反対する会代表
土田 教樹	『伝送便』編集委員
土屋トカ子	ビデオ制作者
問山 栄恵	『琉球新報』記者
東海林 智	『毎日新聞』記者
徳住 堅治	弁護士
富山 栄子	国際交流平和フォーラム代表
鳥井 一平	移住者と連帯する全国ネットワーク代表理事
永尾 俊彦	ジャーナリスト
中島 浩	元全統一労働組合
中西新太郎	横浜市立大学名誉教授
中野 敏男	東京外国語大学名誉教授
中原 純子	全労協全国一般東京労組アソシエーション
中原 道子	早稲田大学名誉教授
仲井間郁江	『琉球新報』記者
中村 美彦	元千葉高教組書記長
村中 哲也	元日本乗員組合連絡会議
な す び	福祉労働者ネットワーク山形労働者福祉会
斎 一郎	弁護士
西浦 昭英	『教えられなかった戦争』シリーズ上 映実行委員会・現地野古抗議隊
西崎 雅夫	『関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う』運営委員
西垣 泰子	明星大学名誉教授・デザイン
西野瑠美子	ルポルタージュ作家
二瓶 一夫	福島県三春町在住
二瓶 久勝	元国鉄闘争共闘会議議長
萩原 健太	弁護士
朴 京子	公益財団法人日朝鮮学生支援会代表理事
朴 南仁	在日韓国民民主統一連合
朴 英 二	映画監督
長谷川和男	朝鮮学校無償化排除に反対する連絡会共同代表
長谷川三郎	元部属解放同盟東京連帯執行委員長
長谷川 宏	哲学者・ヘーゲル研究
羽仁 進	映画監督
羽根 次郎	明治大学教員 / 中国近現代史・現代中国論
樋口 健二	報道写真家
日暮 聖	元法政大学教授・国文学
日比野敏陽	『京都新聞』記者

平賀健一郎	元中小労協政策ネットワーク事務局長
平松 利昭	画家
黄 貴 勲	在日本朝鮮社会科学者協会大阪支部
藤原 晃	神奈川高教組組員
古川 美佳	韓国美術・文化研究
古田 武	文化活動家
白 喆 鉉	韓国・全国労働者政治協会
白 宗 元	歴史学博士
外間三枝子	沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック
星野 潔	リムビース編集部
星野 良明	元国鉄闘争共闘会議副議長
堀川 久司	前千葉高教組委員長
本田 由紀	東京大学大学院教授
前田 朗	朝鮮大学講師
松沢 弘	反リストラ産経労組委員長
松村比奈子	首都圏大学非常勤講師組合委員長
丸川 哲史	明治大学教員
三上 広昭	労働者文芸会幹事
水島 朝穂	早稲田大学教授
宮川 敏一	元京成電鉄労組書記長
三宅 晶子	千葉大名教授・ドイン文化論
村田 忠晴	横浜国立大学名誉教授
文 泰 勝	朝鮮大学校政経学部教員
矢ヶ崎克馬	琉球大学名誉教授
八木 啓代	歌手・作家・プロデューサー
役重 善洋	同志社大学人文科学研究所研究員
安川寿之輔	名古屋大学名誉教授
安田 和也	第五福竜丸展展示館主任学芸員
安田 浩一	ノンフィクションライター
安田 幸弘	JCA-NET
柳田 真	たんぽぽ舎
矢野 静明	画家
山口 直孝	二松学舎大学教員
山崎 久隆	たんぽぽ舎
山下 勇男	社会主義理論研究
山田 勇	元全通東京中支支部第一特殊郵便分會書記長
山本 英夫	フォトグラファー
柚木 康子	不当解雇たたかう日本航空労働者を 支える会事務局長
湯本 雅典	ジャーナリスト
尹 成 録	在日本朝鮮青年同盟中央国際部長
横田 耕一	九州大学名誉教授・流通経済大学特別教授
吉沢 弘志	反基地活動家
吉田 康彦	国際問題評論家
吉田 裕	一橋大学名誉教授
吉留 要	画家
米倉 外昭	『琉球新報』記者
乱 俊 龍	文化活動家
李 俊 植	朝鮮大学校教育学部教授
李 春 熙	弁護士
李 泰 一	朝鮮大学校政治経済学部学長
李 東 埈	ジャーナリスト
李 柄 輝	朝鮮大学校朝鮮問題研究センター教授
林 裕 哲	朝鮮大学校外国語学部准教授
李 英 哲	朝鮮大学校教員
若林 靖久	自治体労働組合書記
渡辺 厚子	大泉ブラス裁判原告
渡辺 治	一橋大学名誉教授・政治学

HOWS (本郷文化フォーラム ワークススクール)

〒113-0033 東京都文京区本郷3-29-10 飯島ビル1階 小川町企画内

TEL.080-9816-3450

URL=http://www.hows.jp.org/

e-mail=how@dream.ocn.ne.jp

郵便振替 00140-5-186275 口座名称 HOWS



本郷文化フォーラム
ワークススクール

2024年度後期講座 11月2日(土)～3月29日(土)

平 日 PM6:45～9:00
土 曜 PM1:00～4:00

HOWSで学ぼう

抵抗と変革を志すひとびとへ



2024年度前期夏季セミナー

- 11月16日(土) 朝鮮は孤立していない! わたしの中東・アフリカ訪問報告——世界の反帝・自主勢力と連携する朝鮮民主主義人民共和国 講師=李永徳 (『朝鮮新報』記者)
- 11月23日(土) 資源略奪戦争としてのイスラエル・ガザ戦争——ジェノサイドの根底にあるガザ沖のガス・油田強奪の目論見 講師=涌井秀行 (明治学院大学国際部付属研究所名誉所員)
- 11月27日(水) 世界の短編小説を読む①——ゴーゴリ作『外套』 講師=立野正裕 (明治大学元教員)
- 11月30日(土) 日米同盟強化・石破改憲政権の本質を徹底的に暴く——正念場の改憲反対闘争を闘い抜くために 講師=高梨晃嘉 (かながわアクション)
- 12月14日(土) 『説得—かわち1974春』(企画・製作=全通労働組合、1974年) 報告=土田宏樹 (『伝送便』編集委員)
- 12月18日(水) 安保法制後の沖縄とヤマト／東京——記者はどう見たか 講師=明真南斗 (『琉球新報』記者)
- 12月21日(土) 朝鮮労働党第8回大会から4年、朝鮮民主主義人民共和国はいま——次期党大会まであと1年、これまでの成果と今後の課題を考える 講師=李柄輝 (朝鮮大学校朝鮮問題研究センター教授)



●世界と日本は、いま、どこに向かっているのか

2024年のいま、わたしたちはどのような世界に生きているのでしょうか。

イスラエル国家による残忍なパレスチナ・ガザ絶滅戦争はいっそう範囲を拡大し、レバノンやイラン、シリア、イエメンといった周辺諸国へも飛び火し、中東全体を巻き込んだ大戦争の危機が生じています。東ヨーロッパのウクライナ戦争も、ウクライナとロシアの双方の人民に多くの流血を強制しながら、いまだに終結の見通しが立ちません。

東アジアにおいても、米・韓・日帝国主義の朝鮮・中国包囲網によって、一年中大規模な軍事演習が繰り返され、全面的軍事衝突に発展しかねない危険な状態が作りだされています。

そして、その戦争の火の粉の舞うなかにガソリンを注ぎ込もうとしているのが、石破自公新政権とそれに追従する改憲勢力にほかなりません。わたしたちは石破茂の語る「憲法第9条改憲・自衛隊明記」「アジア版NATO創設」、「核の共有」といった人民の命を蔑ろにする犯罪的政策を実現させてはなりません。

現代世界は、想像を絶する恐怖と死にパレスチナ人民をさらしながら、いつ第三次世界大戦にいたっても不思議ではない方向に向かっています。すでにダイナマイトの導火線に火は点けられてしまいました。それが炸裂する前にその火縄を断ち切れるかどうか——、まさにその問いと実践の瀬戸際にこの時代に生きるわたしたちは立たされているのではないのでしょうか。

●若い世代のエネルギーは存在する

では、この危機に対して、世界の諸人民は指をくわえて黙って見ているだけなのでしょうか。けっしてそうではありません。欧米では、「Z世代」や「ジェネレーション・レフト」と呼ばれる多くの学生や若い労働者が、それぞれの国の政府によるイ

スラエル支援を断ち切るための運動に立ち上がりました。日本でも少なくない若い世代がパレスチナ連帯運動に立ち上がり、連帯の環を拡げようと、文化・芸術を含むユニークな取り組みをさまざまに展開し続けています。世界でも日本でも若い人びとの行動参加へのエネルギーは疑いなく存在するのです。

●HOWSでトータルな変革の思想をつくりだそう

わたしたちはそうした行動参加の若いエネルギーを、より大きな、ガザ・ジェノサイドを終結させるような運動にしていかに協働していきたいと考えます。そのためには、ガザ絶滅戦争がいかなる構造的な背景によって引き起こされたか、あるいはイスラエル国家の中東侵略に対する米・欧・日諸国の支援がいかなるイデオロギー的な要因のもとで継続しているのか、を考えていく必要があります。また、パレスチナの事態そのものかけっして孤立した事態ではない以上、これを現代世界の全体をとりまく諸関係・諸過程のなかに位置づけて、危機の総体に対決するような闘いを展開していかなければならないと思うのです。そして、同時にこの取り組みは、これまで人類が必死に培ってきた正義と自由を求める多様な文化的遺産を引き継いでいくような豊かなものでなければなりません。

今期もこうした問題意識のもとに、改憲反対や労働運動の再生をめざす講座、朝鮮問題をはじめとする国際関係の講座から文化・芸術講座まで、多面的な企画を組みました。2024年の夏季セミナーは、数多くの20～30代を含む60名近くの参加者を集め、成功裏に実現することができました。この成果を活かしつつ、より広範な共同の場になるように、いっそう取り組みを進展させていこうと考えています。

みなさん、HOWSでの討論に参加して、現代世界の危機に対峙していく変革の視点をとともに探っていきましょう。

2024年度後期 開講講座
11月2日(土) 13時30分~(開場13時)
**ロシア十月社会主義革命
107周年記念集会**

3月8日(土) 予定
2025年国際婦人デー東京集会
※詳細は追ってお知らせします。

1、改憲情勢と日本社会のイデオロギー状況を抉りだす

自民党は前文と9条を柱とする平和憲法の破壊を急いでいる。最低投票数の定めがなく金の力で大宣伝が可能な現行国民投票法によって大衆動員し、戦争法の整備を完遂させようとしている。本シリーズでは、地域で積み重ねた平和運動で見た課題、沖縄と東京とで取材してきた『琉球新報』記者の視点、新自由主義のもとで「自己責任」論を浴びた若者の政治意識を学んで討論し、現在の改憲情勢とイデオロギー状況に抗う変革主体の形成をめざしたい。

- 11月30日(土) 日米同盟強化・石破改憲政権の本質を徹底的に暴く**
——正念場の改憲反対闘争を闘い抜くために
講師=高梨晃嘉(かながわアクション)
※この講座①は特別に開始時間が17時30分になります。
- 12月18日(水) 安保法制後の沖縄とヤマト/東京**
——記者はどう見たか
講師=明真南斗(『琉球新報』記者)
- 3月1日(土) 「Z世代」をとりまく閉塞状況と可能性をさぐる**
——若者が闘いを取り戻すには
講師=中西新太郎(横浜国立大学名誉教授)

2、職場と労働を映画から考える

——自分が労働者であることを見つめ直すために

取り上げる2本の映画は、時と場所は違えど、ともに労働の現場にカメラを据えて労働者が置かれた状態をうつし撮る。『説得』は1974年、大阪・河内郵便局における全通、全郵政(第二組合)の互角の現状を打開しストライキに入るため奮闘する全通東大阪支部の、ある分会の活動に焦点を当てた。全通に入って一緒にやろうと説く組合員たちは、「入っても変わりないで」「おれは一人でええねや」との職場の仲間の反応に、いかに答え得るか。
『人間機械』は2010年代初頭、インド西部の果織工場内部へ分け入り労働の工程をつぶさにうつし出すとともに過酷な労働の実態を明らかにしていく。耳をつぶすほどの機械の轟音、汗と汚れてきたびれたシャツ、対照的にいよいよ際立つのは出来上がっていく布地の色鮮やかさ。映画の終わり近くで工場労働者は訴える。「この状況をどうにかしてくれないか」と。その声を、心の内を、わたしたちは自分の職場でも一度ならず耳にしたことがなかっただろうか。
いかに答え得るか。をともに考える講座にしたい。

- 12月14日(土) 『説得——かわち1974春』**(企画・製作=全通信労働組合、1974年)
報告=土田宏樹(『伝送便』編集委員)
- 3月22日(土) 『人間機械』**(監督=ラーフル・ジャイン、2016年、インド)
についての討論
報告=田代ゆき(組版労働者)

3、パレスチナにおける絶滅戦争

——その経済的背景とイデオロギーを問う

昨年10月7日以降に激化したイスラエル国家によるパレスチナ・ガザ地区に対するジェノサイド戦争は続いている。この背後にあるのは、西側諸国による政治的・経済的・イデオロギー的なイスラエル支援だ。
①の涌井秀行さんの講座では今回のジェノサイドという事態の背景にある要因を「資源略奪」という面から考えていく。そして、②の早尾貴紀さんの講座では、早尾さんの翻訳で近日刊行予定の「イラン人のサイド」とも呼ばれる思想家ハミッド・ダバシの論集をもとに、西側諸国をシオニスト支援に動員し続けるイデオロギーを批判していく方向を検討する。
本シリーズでは、パレスチナにおけるジェノサイドを終わらせるために何と闘い、何をなすべきなのか、参加者のみなさんとともに考えていきたい。

- 11月23日(土) 資源略奪戦争としてのイスラエル・ガザ戦争**
——ジェノサイドの根底にあるガザ沖のガス・油田強奪の目論見
講師=涌井秀行(明治学院大学国際学部付属研究所名誉所員)
- 3月15日(土) 思想問題としてのパレスチナ**
——欧米で継続する植民地主義と人種主義を在米イラン人思想家ハミッド・ダバシが抉りだす
講師=早尾貴紀(東京経済大学教授・社会思想史)

4、朝鮮は孤立していない!

日本では、隣国の朝鮮民主主義人民共和国は世界的に孤立した国であるかのように連日報道されている。しかし、それは日本の「常識」であって、世界の常識ではない。このシリーズでは、反帝・自主を掲げ、これを阻もうとする「西側」帝国主義による孤立・瓦解策動と徹底的に闘い抜く朝鮮民主主義人民共和国の過去・現在・未来を、多角的に考究する。それは、日本のわれわれの過去・現在・未来を逆照射することになるはずだ。
ここからわれわれが何を学び、いかに闘いの糧としていくか? このシリーズでは、その対話を、講師と受講生の垣根を越えて創り出してゆきたい。

- 11月16日(土) 朝鮮は孤立していない!**
わたしの中東・アフリカ訪問報告
——世界の反帝・自主勢力と連携する朝鮮民主主義人民共和国
講師=李永徳(『朝鮮新報』記者)
- 12月21日(土) 朝鮮労働党第8回大会から4年、朝鮮民主主義人民共和国はいま**
——次期党大会まであと1年、これまでの成果と今後の課題を考える
講師=李柄輝(朝鮮大学校朝鮮問題研究センター教授)
- 1月11日(土) 米日支配階級の在日朝鮮人政策の本質**
——「米占領期」の朝鮮民族教育弾圧から朝鮮学校差別の意味を問い直す
講師=金陽昇(朝鮮大学校教授教育学部長)

5、世界の短編小説を読む

(開始は18時30分)

本年度前期では「語り」の種々相をとおして、とかく一次元的な時間と発想とに囚われがちなわれわれの日々をいかにして突き放すか、そして人の生を織り成す情熱や執着の多元性と多様性に改めて目を向けるべく、四編の作品を読んだのだった。
後期はその第二部として、独創性豊富な作家たちのいっそう奇想天外かつ鋭い観察と批評性を混えた想像力の饗宴に連なってみよう。

- 講師=立野正裕(明治大学元教員)
- 11月27日(水) ゴーゴリ作『外套』**(岩波文庫)
 - 1月15日(水) ポー作『鋸山奇談』**
(『ポオ小説全集3』創元推理文庫)
 - 2月12日(水) エリアーデ作『ホーニヒベルガー博士の秘密』**
(福武文庫)
 - 3月19日(水) マーク・トウェイン作『ハドリーバーグの町を腐敗させた男』**(『マーク・トウェイン短編集』新潮文庫)

6、芸術運動のアクチュアリティ

昨年冬、シオニスト国家の爆撃で虐殺されたガザの詩人リファアト・アラリールは、10年前に編著として刊行したガザの若手作家たちによる短編小説集「ガザからの手紙：パレスチナを物語る」(未邦訳)の序文で、次のように述べていた、——「書くという行為は、歴史や人類の経験を保存するものであると同時に、侵略者や植民地主義者に対する抵抗でもあるのだ。」
アラリールのこの言葉にみながざっているのは、芸術の創造や読解そのものを抵抗の場にしていこうとするパレスチナ人文学者の決意にほかならない。
真の意味での「芸術の政治化」(ヴァルター・ベンヤミン)はいかに果たしうるか。あるいは、20世紀の悲劇や喜劇を芸術家として受け止めた劇作家ベルトルト・ブレヒトや画家パブロ・ピカソ、詩人パウロ・ツェランなどの試みを、いかに現代において継承していくか。そこでは、芸術の作り手や読み手の「層」としての形成といった課題を問うていくことも不可欠になる。
このシリーズでは、そうした芸術運動の形成にかかわる諸問題を、複数のテーマや角度から、参加者のみなさんとともに考えていきたい。

- 1月25日(土) 武井昭夫—吉本隆明論争の今日的意味**
——1960年代前半のイデオロギー闘争からとらえる現代日本の思想状況
講師=山口直孝(二松学舎大学教員)
- 2月1日(土) パレスチナ関連における文学ジャーナリズムの作品を検討する**
——岡真理「小説 その十月の朝に」、現代詩手帖特集「抵抗の声を聴く」ほか
担当=伊藤龍哉/杉林佑樹(報告者は未定)
- 2月8日(土) 目取真俊の文学との出会い**
——卒業論文のテーマをもとにして
報告=成彩玲(朝鮮大学校外国語学部学生)
- 3月29日(土) 映画『風音』**(監督=東陽一、脚本=目取真俊、2004年製作) **についての討論**
——舞台は沖縄。海に面した崖の上に頭蓋骨が置かれている。こめかみに穿たれた弾痕から「風音」が聴こえてくる。

7、この人にきく

- 1月18日(土) 三中全会後の中国経済の現状と対外戦略**
——米中「新冷戦」のゆくえ
講師=朱建榮(東洋学園大学客員教授)
- 2月19日(水) 初の女性駐日キューバ大使にたずねる**
——日本とキューバ、その二国間の関係について
講師=ヒセラ・ガルシア(駐日キューバ大使)
※この講座②は特別に開始時間が18時になります。

HOWS講座カレンダー 2024年度後期(11月~3月)		
日程	講座	講師・報告
① 11月2日(土)	ロシア十月社会主義革命107周年集会	
② 11月16日(土)	朝鮮は孤立していない! わたしの中東・アフリカ訪問報告 ——世界の反帝・自主勢力と連携する朝鮮民主主義人民共和国	李永徳
③ 11月23日(土)	資源略奪戦争としてのイスラエル・ガザ戦争 ——ジェノサイドの根底にあるガザ沖のガス・油田強奪の目論見	涌井秀行
④ 11月27日(水)	世界の短編小説を読む①——ゴーゴリ作『外套』	立野正裕
⑤ 11月30日(土)	日米同盟強化・石破改憲政権の本質を徹底的に暴く ——正念場の改憲反対闘争を闘い抜くために	高梨晃嘉
⑥ 12月14日(土)	『説得——かわち1974春』 (企画・製作=全通信労働組合、1974年)	土田宏樹
⑦ 12月18日(水)	安保法制後の沖縄とヤマト/東京 ——記者はどう見たか	明真南斗
⑧ 12月21日(土)	朝鮮労働党第8回大会から4年、朝鮮民主主義人民共和国はいま——次期党大会まであと1年、これまでの成果と今後の課題を考える	李柄輝
⑨ 1月11日(土)	米日支配階級の在日朝鮮人政策の本質 ——「米占領期」の朝鮮民族教育弾圧から朝鮮学校差別の意味を問い直す	金陽昇
⑩ 1月15日(水)	世界の短編小説を読む② ——ポー作『鋸山奇談』	立野正裕
⑪ 1月18日(土)	三中全会後の中国経済の現状と対外戦略 ——米中「新冷戦」のゆくえ	朱建榮
⑫ 1月25日(土)	武井昭夫—吉本隆明論争の今日的意味 ——1960年代前半のイデオロギー闘争からとらえる現代日本の思想状況	山口直孝
⑬ 2月1日(土)	パレスチナ関連における文学ジャーナリズムの作品を検討する——岡真理「小説 その十月の朝に」、現代詩手帖特集「抵抗の声を聴く」ほか	報告者未定
⑭ 2月8日(土)	目取真俊の文学との出会い ——卒業論文のテーマをもとにして	成彩玲
⑮ 2月12日(水)	世界の短編小説を読む③——エリアーデ作『ホーニヒベルガー博士の秘密』	立野正裕
⑯ 2月19日(水)	初の女性駐日キューバ大使にたずねる ——日本とキューバ、その二国間の関係について	ヒセラ・ガルシア
⑰ 3月1日(土)	「Z世代」をとりまく閉塞状況と可能性をさぐる——若者が闘いを取り戻すには	中西新太郎
⑱ 3月8日(土)	国際婦人デー東京集会(予定)	
⑲ 3月15日(土)	思想問題としてのパレスチナ ——欧米で継続する植民地主義と人種主義を在米イラン人思想家ハミッド・ダバシが抉りだす	早尾貴紀
⑳ 3月19日(水)	世界の短編小説を読む④——マーク・トウェイン作『ハドリーバーグの町を腐敗させた男』	立野正裕
㉑ 3月22日(土)	『人間機械』(監督=ラーフル・ジャイン、2016年、インド)についての討論	田代ゆき
㉒ 3月29日(土)	映画『風音』(監督=東陽一、脚本=目取真俊、2004年製作)についての討論	

◎HOWS付属ゼミナール
HOWS本科生と聴講生は、有志参加による下記ゼミナールに参加できます。参加費は各ゼミ毎に別途お支払いください。

①HOWS文学ゼミ(戦後文学ゼミを改称)
チューター=山口直孝、松岡慶一

2000年から2016年まで主に戦後の文学・芸術運動を検証する作業を続けてきましたが、これを第1期として、2018年からは第2期、名称もHOWS文学ゼミで再出発しています。第1期の作業を継承するのみならず、いかにして現在の荒廃した支配的文化状況を変革して、文学・芸術運動を再生していくかが課題です。

◀2024年度後期募集要項▶

- 定員 本科生20名
 - ・全講座22回(各週1~2回程度)
 - ※ロシア十月社会主義革命集会、国際婦人デー集会は本科・聴講券の対象ではありません。
 - ・本科生は、すべての講座を受講できます。
- ◎聴講生20名
シリーズを問わず、自由に講座が選べる8枚綴りの聴講チケットがあります。
- 費用
- ◎本科生 入学金…1万円(次期以降は不要)
受講料…前期……25,000円、後期:25,000円
・前期5月、後期11月の開講時までそれぞれ納入してください。
- ◎聴講生 聴講料 回数券…10,000円
・聴講料納入と引き換えに8回まで使える聴講チケットをお渡しします。
・1回の受講料は本科より割高ですが、一般受講より割安になります。
・聴講チケットは、期間内のみ使用できます。
- ◎一般 受講料…1,500円(各講座1回につき)
・本科生・聴講生以外の一般参加は、受付で現金にていただきます。
- 申込方法
・所定の申込用紙に必要事項を記入のうえ、入学金・受講料を添えて、直接事務局に持参、または現金書留にて郵送してください。郵便振替ご利用の際は、申込用紙を別途郵送または事務局にお持ちください。
- 注意事項
・HOWSゼミナールについては、会計が異なります。
・講師の急病等やむを得ない事情により、日程・テーマ・講師等が変更になる場合があります。